

“教育山形「さんさん」プラン”を基盤とした授業改善のポイント

村山教育事務所

1 はじめに

村山管内の各学校では、“教育山形「さんさん」プラン”を生かしたきめ細かな指導を基盤とした授業づくりが行われ、一人ひとりの「確かな学力」の育成を目指した授業改善が推進されている。

本プランを生かして学校の教育の一層の充実を図るために、今年度も村山教育事務所と管内各市町教育委員会による「教育山形『さんさん』プラン推進ワーキンググループ」を開催し、教科担任制や学校が抱える教育課題に対する施策について、推進状況や効果・課題等の情報共有を行った。教科担任制については、教科担任マイスターを配置している市町及び教科担任制を導入している市町から、教員の指導力向上や児童生徒の学力向上に有効である旨の報告をいただいた。また、学校が抱える教育課題に対する施策については、「特別支援学級における学級編制基準の引き下げ」や「別室学習指導教員の配置」について、配慮すべきことが複雑化している現状から、継続の重要性が感じられた。

2 村山管内における実践から

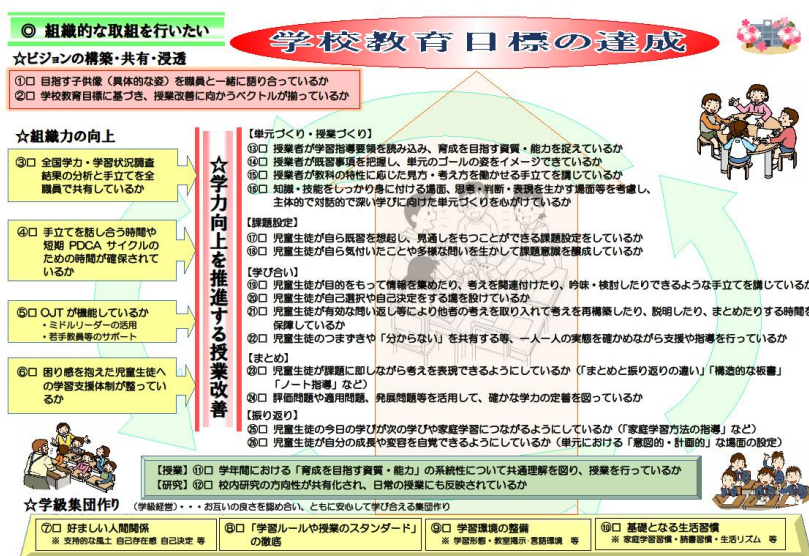
(1) 各学校における「『確かな学力』を育成するための授業改善シート」及び「『生徒指導の実践上の視点』を生かした授業づくり」の活用

本事務所では、リーフレット（右記参照）を作成し、生徒指導の実践上の視点を授業の中で意識し、授業において発達支持的生徒指導を行う「学習指導と生徒指導の一体化」について助言した。

「『確かな学力』を育成するための授業改善シート」では、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」という観点から学習活動等の充実の方向性を改めて捉え直し、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立って授業改善を図ることで資質・能力を育成することを目指した。

「『生徒指導の実践上の視点』を生かした授業づくり」については、生徒指導提要の改訂を受け、「自己存在感的感受」「共感的な人間理解の育成」「自己決定の場の提供」「安全・安心な風土の醸成」の4つの視点を示し、日々の実践を振り返ることができるよう改善を図った。

(2) 「組織力の向上」を目指した学力向上支援チームによる学校訪問



組織力を生かした学力向上の取組みを推進するために、管理職とともに「チェックリスト」を指標とした学校の教育活動全体の評価を行い、短期 PDCA サイクルを回すよさを実感できるようにすることを大切にしました。

また、改善点を明らかにし、学校課題に対してポジティブなスタンスで対策を練る・提案することを継続して行った。

(3) 「指導力の向上」を支援する教育事務所研修の実施

学習指導要領及び第6次山形県教育振興計画、「教育山形「さんさん」プラン」を踏まえ、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」という観点から学習活動等の充実の方向性を捉え直し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進に向けた研修会を実施することで、教員の指導力の向上を目指した。

学習指導力向上研修会

* 第1回「育成を目指す資質・能力」を核にした組織力の向上（講義及び演習）

教務主任や研究主任など授業づくりや学力向上の取組みの中核を担う小・中学校の先生を対象とし、学校として育成を目指す資質・能力を焦点化し、必要となる教育活動の「統合と更新」を進めるとともに、取組みの成果を意図的、計画的、継続的に評価していくことについて学びを深めた。

* 第2回 学びに向かう集団をつくる教師力・学校力 ―特別活動などを活用して―（講義）

各学校における安全・安心な風土の醸成を目指し、教育課程の「特別活動」に焦点を当て、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決していく資質・能力の育成について学びを深めた。

* 第3回「学びに向かう力、人間性等」を育成する保育・教育について考える（講義）

（第3回目は、「幼保小中接続推進研修会」と兼ねて実施）

非認知能力についての講義を通して、幼保小中それぞれの子供の発達や育ちに応じた「学びに向かう力、人間性等」をどのようにして育み、見取っていくかについて、校種を超えて学びを深めた。

ネットワーク型研修会

教科教育研究コース（国語・算数部会、社会・総合部会）、特別支援教育研究コースの3つに9名が参加した。第1回研修会では、「『個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実』は、なぜ求められているのか」についての講義を聞き、「子どもが主役になる授業」（村山教育事務所学校教育指導の重点より）を進めるために、子どもの姿や授業づくりについて研修を深めた。

3 おわりに

「各学校で育成を目指す資質・能力」を明確にし、全教職員の共通理解のもと、日常的に授業改善に取り組んでいる学校が増えている。各教科等の指導と生徒指導を一体化させた授業づくりについて周知していくことをとおして、一人ひとりの子供を主語にする教育活動を推進し、本プランの目指す「わかる授業」「いじめや不登校のない楽しい学校」の実現を目指していきたい。

“教育山形「さんさん」プラン”を基盤とした授業改善のポイント 最上教育事務所

1 はじめに

今年度は、新型コロナウイルス感染症が5類になり、「学校の新しい生活様式」を意識しながらも以前の教育活動に戻りつつある。

授業においても、グループ学習があたり前のように行われるようになり、主体的・対話的で深い学びが推進されるようになってきている。

そのような状況の中で、主体的・対話的で深い学びを通して、確かな学力の育成を目指していくために、最上教育事務所では、「授業のレベルアップに向けて」（右図）を作成し、授業改善のポイントを示すとともに、各学校での探究の過程を意識した授業づくりについて指導・支援を行ってきた。「授業のレベルアップに向けて」については、地区でも広まってきており、参考にしながら独自の授業スタンダードを作成する学校が見られるようになった。地区全体の探究的な学習の推進に効果を発揮している。

授業では、教師が“教育山形「さんさん」プラン”による少人数の利点を生かし、一人ひとりの考えを大切にしながら児童生徒主体のペアやグループ学習における対話を通じた深い学びを目指す授業づくりが進められている。

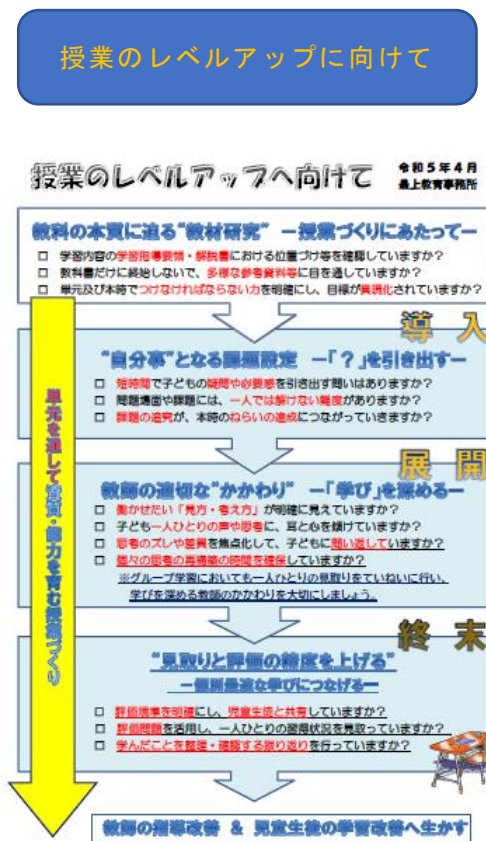
また、最上教育事務所としてチームで授業を作り上げる「もがみ授業づくり研修『チームMOGAMI』」や、「学習指導力向上研修会」等を通じて、各学校における授業づくりを支援している。

2 最上管内の実践から

(1) もがみ授業づくり研修「チームMOGAMI」

最上地区は人口減少が進んでおり、どの市町村においても学校規模が小さくなっている現状がある。そのため、1学年1学級という学校や校内に教科担当教員が1人しかいない学校も多くなってきている。小規模の学校では、授業実践や授業の悩みを相談する機会が少なくなっている課題が見受けられる。そのような状況を打破し、先生方が自信を持って授業をしていくために、「チームMOGAMI」という授業づくり研修を行っている。

「チームMOGAMI」は、3名の先生を1グループとして、グループで相談しながら単元計画から評価までの授業づくりを行う研修である。校内研究では、本時の授業がメインになることが多いが、習得、活用、探究をバランスの取れた単元づくりを中心に検討を重ねることで、教員の学習指導力の向上を目指している。普段は同じ学年・教科の先生と一つの単元についてじっくり話し合う機会が少ないので、大変勉強になるとメンバーからは好評である。



今年度は、小学校算数、中学校社会においてグループを編成し、研修を行った。

① 小学校算数

公開授業：金山町立金山小学校 第6学年 算数
単元名：「順序良く整理して調べよう」並べ方と組み合わせ方
講師：山形県教育センター 畠中 雄紀 指導主事

② 中学校社会

授業実践：新庄市立日新中学校 第3学年 社会科
単元名：「地方自治とわたし」
助言者：最上教育事務所 佐藤 公大 指導主事

参加したメンバーからは、「同じ教科や同じ学年の先生方3人で1つの指導案をつくることは、貴重な経験で非常に勉強になることが多かった」という感想があり、実践を通じて成果を感じている様子がうかがえた。また、授業研究会の参加者からも講師の先生の講話内容も含めて、今後の授業改善につながる研修になったとの評価を受けた。

(2) 学習指導力向上研修会

全国学力学習状況調査の結果を、授業改善に生かしていくために、学習指導力向上研修会を開催している。今年度の学習指導力向上研修会では、各学校の研究主任を中心に先生方に参加していただいた。地区全体の全国学力学習状況調査の結果を分析し、授業改善に向けて地区全体で共通に取り組むべきポイントを3点示した（下図参照）。

授業改善へのアクションについては、参加した研究主任の先生方が、学校で全教職員に伝達するようにしている。また、学校訪問等の全体指導や授業後の協議の場などで、事務所の指導主事が授業改善へのアクションの視点を踏まえた助言指導を行っている。

また、研修会では、全国学力学習状況調査の分析説明を行った後、授業改善の課題の一つである「学習評価」について、一般社団法人 教育デザイン研究所 CoREF プロジェクト推進部門の飯窪真也主任研究員を講師に迎え、「確かな学力を育成する学習評価」というテーマで、講義・演習を行った。

講義・演習を通じて仮説検証型（子どもの学びの様子を想定と比べながら見取る）の授業研究会の重要性について学びを深めることができた。

先生方からは、「子どもの理解を見取ることが大事であり、どのように見取るとよいかという方法を教わることができました。」「子どもの姿を見取るポイントや授業研究の在り方について改善のヒントをいただくことができました。」「授業研究会の事後研究会がより深まるような持ち方について今回の演習が大変勉強になりました。」等の好意的な感想が多かった。

3 授業改善へのアクション(地区としての取り組み)

習得・活用・探究のバランスの取れた単元づくり

- ・単元において教科でつきたい資質・能力を明確にし、単元を通して力をつける授業作りを行う。
- 教科でつきたい資質・能力と学校としてつきたい資質・能力をそれぞれ明確にする。
- 生きて働く知識・技能にするために「見方・考え方」を働かせ、活用する場面を意図的に設定する。
- 本時の学びを見習生が視点に沿って振り返りを行い、必要に応じて学びを家庭学習につなげる。または、家庭学習での学びを授業に生かす。

教科の本質を捉えた指導と適切な評価

- ・教科の本質を捉えた課題設定と見取りを通じた適切な評価を行う
- 教科の本質にせまるための課題設定を行う
- 評価規準を明確にし、見習生と評価規準を共有する。
- 多面的・多角的に思考させるとともに、個における思考の再構築を促す。
- 本時における子どもの学びを評価するための評価問題、活動を実施する。
- 評価を見習生の学習改善・教師の指導改善に生かす。

PDCAサイクルを確実に回す

- 授業改善の結果を全国学調、NRI等の分析で客観的に検証する。
- アクションプランと校内研究をリンクさせてPDCAサイクルを回す。
- 【CAの充実を図る 客観的データに基づくC(チェック)と焦点化したA(アクション)】

3 おわりに

「主体的・対話的で深い学び」を実現するには、「さんさん」プランを活用し、一人ひとりの学びをしっかりと見取ることが重要である。授業改善を通じたよりよい授業づくりについて、今後も先生方を支えていきたい。

“教育山形「さんさん」プラン”を基盤とした 「誰一人取り残さない教育」の実現に向けた授業改善のポイント

置賜教育事務所

1 はじめに

“教育山形「さんさん」プラン”の目的に、個に応じたきめ細かな指導による「わかる授業」の実現がある。学習者にとっての最適な学びとは何か。管内では子どもの学びの姿で授業が語られ、学び手の主体性をテーマに授業改善が進められている。今後も、指導の個別化や学習の個性化を意識した取組みが進むことで、児童生徒が一人ひとりの特性や学習進度、興味・関心等に応じて、楽しく学ぶ経験を重ねていくことができるだろう。誰一人取り残さない教育の実現を目指し、“教育山形「さんさん」プラン”を下支えに、置賜で積み上げてきたことを紹介する。

2 「おきたまの教育」をベースにした取組み

(1) 「おきたまの教育」について

昨年度までの構成を大きく見直し、先生方とともに推し進めたい教育の在り方として示してきた「おきたまの教育」。何かに気付き自分が変わる。そんな「学び」の時間を、子どもも大人も「自分」や「自分たち」を主語につくっていくことで、共に学びに向かう「誰一人取り残さない教育」を実現していきたいという願いを込めた。

(2) 学力向上研究協議会 (①5月29日実施 ②1月16日実施)

各学校の校内研究のテーマには「主体的」「自分から」といった言葉が並ぶ。学びの内容や方法が児童生徒にとって自分事になっているのか、自分を主語にした学びとなっているのか等を検証の視点とし、実践が積み上げられている。

研究主任を主な対象とした本協議会では、以下のような内容を取り上げた。

① 校内研究の一層の充実に向けて

山形大学大学院教育実践研究科の鈴木貴子准教授より「主体的に学ぶ児童生徒の育成」において大切にしたいこととして、育成を目指す資質・能力を児童生徒と共有すること、「対話力」と「傾聴力」の重要性、教師のファシリテーション力について講義いただいた。

② これから求められる学校教育の姿とは

校内研の充実に向け、「対話の文化の醸成」「理念の共有」について対話型演習で学びを深め合った。学習者が自ら学びとることができるようにすることが重要であることや、PDCAサイクルを回しながら授業改善を図るためにも効果検証の視点を持つことが大切であることを確認した。

(3) 誰一人取り残さない授業づくりプロジェクト

今年度は、プロジェクト理念「すべての子どもに自ら学びをつくっていきける姿を」の下、『子どもの実態や発達段階に即して、誰一人取り残さず、子ども一人ひとりに自ら学びをつくっていく力を育む』授業、授業研究会の具体例を置賜管内に発信するをミッションとし取り組んだ。小・中学校教員の合同チームと指導主事が協働で授業づくりを行い、学びの系統性を考慮した実践を積み上げることができた。

<国語> ～学びの意欲をどの子どもにも！！～ (小学4年で実践)

学びの意欲を育て、それを持続させていくために、単元構想の工夫や言語活動の充実を図った実践を行った。教科横断的な学びの観点から、総合的な学習の時間との関連や年間カリキュラムのモデルも提示した。本単元で「リーフレットづくり」を通して学んだ要約の方法や書き表し方の工夫は、総合学習のまとめにもつながるものとして児童と共有化されたことで、児童にとって学ぶ必要性や意義が感じられるものになった。学習の見通しの持たせ方や個に応じた支援の工夫、調べる対象や調べ方、まとめ方を自己選択できるようにしたことも、児童の意欲を持続させる上で有効だった。

<算数・数学> ～自由進度学習に挑戦！～ (小学3、4年複式で実践)

校種を問わず「子ども達の学習内容の理解度の差」が大きな課題であることを確認し、自由進度学習の可能性を探った。実践を通して、一斉授業では「受け身」だった児童生徒にも、自分の学びをメタ認知し自己調整を図る姿が見られるようになった。また、全員が安心して間違えることができる場ができたことで、間違えた問題に再チャレンジし、失敗から前向きに学ぶ児童生徒が増えた。自由進度学習は万能な学習スタイルではないが、子どもが自立した学び手となるための一つの方法・手段として有効であることや、教師は伴走者となることの意味を確かめることができた。

<外国語> ～自ら学びをつくるには？～ (中学1年で実践)

英語力の差を超えて「どの子どもも夢中になる瞬間がある」。子どもの内側にある「～したい」という思いを引き出すために、教師の役割や題材の見極め、ねらいに沿った中間指導、児童生徒との単元目標の共有等、4名の英語教育実践リーダーが話し合いを重ね、それぞれに授業を公開してきた。教師が子ども達の姿を具体的に想像して授業を構想することはもちろん、児童生徒の一人ひとりのペース、学び方で、焦ることなく繰り返し取り組むことの重要性を確認することができた。

【合同チームの先生方の声より】

- ◆「誰一人取り残さない」ということは、どの子どもにも意欲を持たせること、学びたい、学ぶことは楽しいと感じさせることだと思えるようになりました。また、仲間と学ぶことよさ、選択すること、自由度を広げることの効果も感じられました。
- ◆教師は子ども達のよき伴走者として、子ども達が自分の足でゴールにたどり着く喜びを実感できる授業ができるよう、チャレンジしていきたいと思えます。

3 おわりに

「自立した学び手」を育成するには、「さんさんプラン」を活用し、一人ひとりの学びを丁寧に見取り支援すること、安心して学べる学習環境を整えることが大切である。今後も「子どもを信じる・子どもが決める・子どもが没頭する」授業を先生方と一緒に創造し、児童生徒の学習改善と教師の指導改善を図りながら、個々の能力を最大限に伸ばしていきたい。

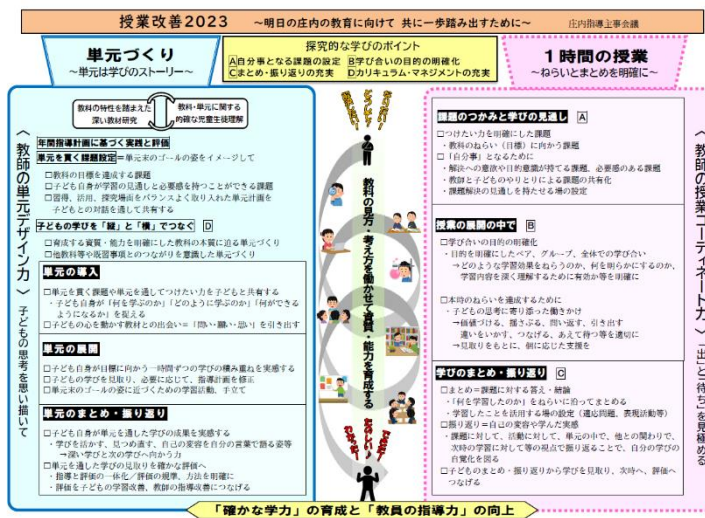
“教育山形「さんさん」プラン”を基盤とした授業改善のポイント

庄内教育事務所

1 はじめに

庄内教育事務所管内では、各学校において児童生徒の確かな学力の育成を目指し、“教育山形「さんさん」プラン”を生かしたきめ細かな指導を基盤とした授業づくりに取り組んでいる。

各学校への指導・助言の際には、庄内指導主事会で作成している授業づくりワンペーパーを活用し、目指す方向を同じにして授業改善を進めていくようにしている。また、昨年度末の庄内指導主事会において成果と課題について協議を行い、庄内の強みを生かした支援につながるよう共通理解を図った。



2 庄内管内における実践から

(1) “教育山形「さんさん」プラン”に係る非常勤講師研修会の実施

庄内では“教育山形「さんさん」プラン”に係る非常勤講師の先生方を対象に、それぞれの配置の意図に沿って、少人数指導の在り方や生徒指導等について研修を深め、個々の資質の向上を図ることをねらいとした研修会を年2回実施している。

第1回は、新たに改訂された生徒指導提要の視点をもとに、児童生徒の資質・能力の育成に向けて、生徒指導を意識した授業づくりについて研修を行った。

第2回は、児童・生徒の多様な教育的ニーズの高まりを受け、授業づくりやTT支援等での対応の仕方や環境構成について研修したいという先生方のニーズに応じて、児童生徒の障がい特性に応じた指導・支援の在り方について、具体的な事例をもとに講義・演習を行った。それぞれの立場から子ども達への適切な支援について学ぶ機会となった。



【参加者の振り返りより（第2回）】

困難さはそれぞれ違うので、その子に合った支援を考えていく必要性を感じた。情報交換では、同じような悩みを持つ先生方と話をすることで、少し安心することができた。

(2) 「学校研究ワンアップ研修会」の実施

本研修会は主に管内の研究主任を対象としており、学力向上の推進に向け、学校研究並びに授業改善推進の中核となる校内リーダー育成を図ることを目的としている。

また、参加者の傾向として、研究主任経験年数が2年以下の若手の研究主任が増えていることか

ら、第1回研修会を年度初めに設定し、学校間のネットワークづくりにもつながるようにした。

第2回研修会は、宮城教育大学大学院教育学研究科 市川啓准教授から「教科の本質的な学びの実現につながる授業改善のポイント」というテーマで講話をいただいた。教科の本質を学ぶための問題解決的学習、そのための授業研究の必要性など、今後の授業改善や学校研究の推進に向けて、改めて考える機会となった。

【参加者の振り返りより（第2回）】

主体的・対話的な学びを学校研究でも目指しているところだが、改めて未知の状況に対応できる思考力・判断力・表現力が身に付いているのかということを考える機会となった。



第3回研修会は、「庄内地区における全国学調の結果から見えること」というテーマで講義・演習を行った。グループ演習では、今年度出題された問題を分析することで、授業改善に向けた次の一手を話し合った。参加者の振り返りには、「全国学調の結果から生きて働く資質・能力を育成するために、授業改善が必要だと改めて感じた」、「全国学調のねらい3つのうち、継続的な検証改善サイクルの確立が1番の課題と感じた」等があった。付けたい力を基にした授業改善について共有が図られた。

(3) 「学力向上研究協議会」の実施

R3年度から、学校研究ワンアップ研修会と学力向上研究協議会を分けて開催している。学力向上研究協議会は管理職及び教務主任を対象として、「学校組織からの学力向上」という視点からのメッセージを伝えることができた。

前半は、全国学力・学習状況調査の県及び庄内管内の結果や分析について、具体的に伝える場とし、各学校において、後半の学習指導や次年度に向けた授業改善に生かすことができるようにした。

後半は、国立教育政策研究所 高橋典久総括研究官から「生徒指導提要の改訂の視点を生かした授業づくり」というテーマで講話をいただいた。一人ひとりの学びを支え、学力向上を図っていくために生徒指導の視点を活かした授業づくりの必要性について話をいただいた。学校経営の視点から授業改善に生かすことのできる内容であった。

【参加者の振り返りより】

授業改善も不登校対策も学校の魅力を高めていかなければならない点で共通しており、今後ますます「生きる力」を付けるために、学校として運営を考えていく必要があると思った。



3 おわりに

「学校として育成を目指す資質・能力」を明確にし、組織的かつ計画的な教育活動が実施されるよう、今後も学校訪問や各種研修会での指導・支援を続け、本プランのねらいである「わかる授業、楽しい学校」につなげていきたい。